岐阜米穀㈱　メールマガジン

今回のテーマは

「続くお米の環境変化について（２）」

今回はお米の環境変化についてのお話（２）です
連日のマスコミ報道で、いつの間にか米が値上がり、一斉に米がスーパーの棚から消えているとかを連日騒がれています。
報道では訪日のインバウンド需要が要因と言われますが、ありえないと思いませんか？

農水省は「全国的に見れば在庫はひっ迫している状況ではない」の発表は何故でしょうか。

直接の原因は昨年の米の作柄の数字が悪かったのに、意図的に通常の作柄にされてしまっていたことと、米価を引き上げようとする行政の力が働いていたことでした。
作柄が普通作だったので不作の場合の政府の備蓄米の放出が無かったことが重なりました。

中でも一番の原因は、昨年の夏の高温で、圃場では収量に関係する分けつが少なく(稲が主茎の脇から新たな茎を出し穂をつけること)が収穫量や品質に大きく関わったのです。
分けつ不足で、残りの穂に栄養が行き渡り結果的に米粒が大きくなったのですが、粒の小さい規格外のくず米の発生が昨年は著しく少なくなったのです

過去には規格外は餌用などに回ることもありましたが、国内需給率を上げる為に最近では餌用米は補助金対象の為、年度初めに契約した数量を納める義務が発生します。この為、主食で使われるお米が餌米に回された結果米不足になったのでした。

鶏の餌に補助金の米を食べさせて黄身が白くなることを聞かれたことはあるでしょうか。
くず米は製菓やビールの原料になりますが、一番は特売用の低価格米に使用されるのです。
低価格米の出荷量が確保できなくなり、結果として主食用のお米の総量が減りました。

マスコミ報道では新米の入荷頼りとなっていますが、国全体の在庫が足りなくなったことで何ヶ月かで収まるとは考えにくいのではないでしょうか。

これからの暑熱化による世界の食糧生産の減少と、一番は日本の周囲の海水温の異常な高さによる国内生産の減少と、海外の旱魃などによる食料生産減からくる輸出規制などが重要となってきます。
環境の急激な変化と、人為的政策の誤差が重なって、変化に対応できないことが原因です。

今後、農水省の政策が環境変化と実際の業界の対応とズレることがでてくると思われます。
加工米・新規需要米、米の輸出振興などの米余りを前提とした政策が進められていきます。

農林中金の何兆円もの欠損が農協に押し付けられたり、農協バンクの支配下におくなどでも、農水省と全農系統の関係性は嫌がうえにもこれからの政策に反映されていくでしょう。
米流通においても、全農の都合と米の扱い量によって卸の集約も進むことになるでしょう。
数年後に振り返ると 2024 年は米業界の次のステップが決定されたと言われる変化の年なのです。

自社の四工場では、輸入品の地下水を汲みあげて冷やすクーラーを設置しています。
電気料金が一割以下しかかからないのでローコストで助かっていることと、建物を閉め切らなくても使用できることと、働く人にもやさしいことが特徴となっています。

この夏、牛・豚・鶏が暑さで生産性が落ちてしまっているとのテレビで見ます。使ってみてくださいと貸し出しを行っており、お役立てできないかと楽しみにしております。